第１章　焼津市の概要

１　焼津市の位置と概要

焼津市は静岡県中部の志太平野の東端に位置します。東は駿河湾に面し、北は高草山、満観峰、日本坂峠、花沢山などの山々（高草山山地）で市域を分かち、南は大井川が市境となっています。また、西は藤枝市につながります。

市域は 70.3 ㎢、東西に狭く南北に長く、海岸線は 15.5 ㎞にわたります。面積は県内 35 市町中 28 位と広くありませんが、平地が大半のため可住地面積の割合は県内の市では１位の 94.5%、人口は約 13.8 万人（うち外国人は４千人）で県内７位です。

北は旧街道が通る日本坂峠を含む高草山山地によって静岡市と接します。地勢的に明確に分かれていますが、古代から峠越しに旧街道でつながり、交流は続いてきました。西は同じ志太平野で藤枝市、島田市に接続し、南は大井川を隔てて吉田町と接します。志太平野は大井川流域の文化圏として人的交流も盛んで、歴史文化に多くの共通点が認められます。大井川上流の川根本町などとも木材の流通などを通して、歴史的なつながりがあります。また、大井川は天正の瀬替え（1590 年）以前は本流を和田浜付近としていました。古来より駿河・遠江国の境は大井川とされていたため、瀬替え以降も大井川地区は周辺を含めて遠州分とされており、大井川越しに接する吉田町以西の歴史文化とも関係を持っています。

図 1-1　志太平野

写真 1-1　高草山から駿河湾を望む

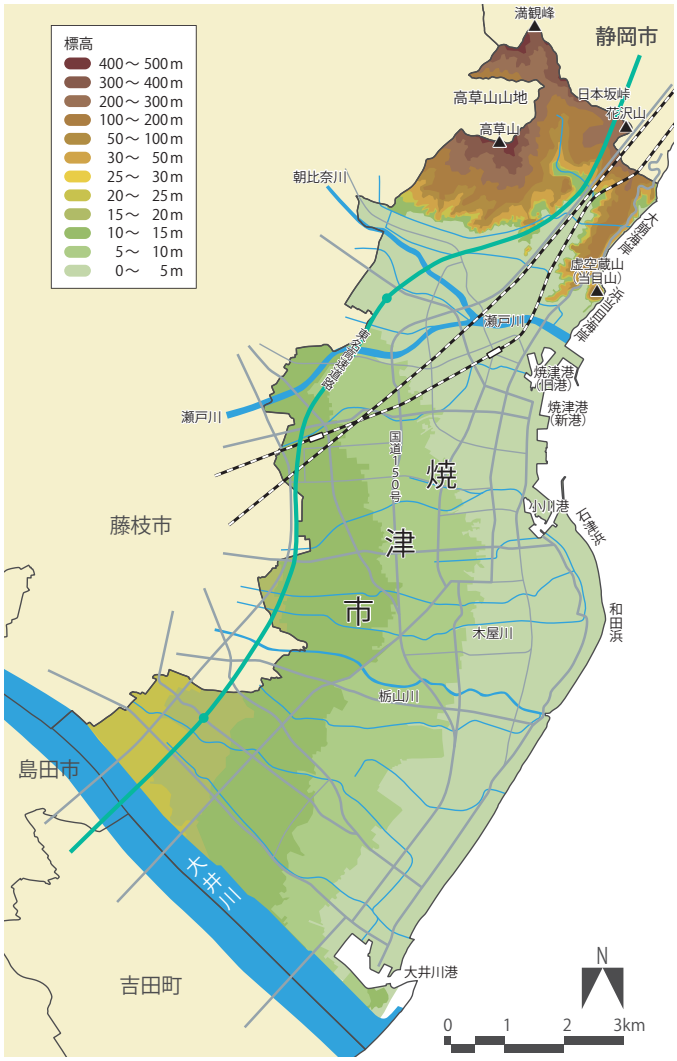


図 1-2　地形と交通

２　自然的・地理的環境

焼津市ではコンパクトな市域に駿河湾、高草山山地、そして大井川により形成された扇状地の、３つの特徴的な自然、地理がみられます。

（１）海浜部の特徴

駿河湾に面した海浜部は、大井川焼津海岸砂礫洲地（されきす）といわれる臨海部地形が南北に延び、その内陸側に田尻（たじり）低地が沿っています。およそ3,000年前の縄文（じょうもん）時代に、ほぼ現在の海岸線になったと推定されます。海岸部では各地に天然ガスが産出し、これが日本武尊の野火の難に結びついたのではないかともいわれます。

図 1-3　地形の特徴

海岸線の和田浜部分が海へ膨らんでいるのは、この一帯がかつての大井川本流の河口で、長期間にわたり土砂が大量に流れたことを示しています。現在、浜当目（はまとうめ）海岸、石津（いしづ）浜、和田浜などでみられる砂洲（さす）は、砂利を主体とする砂礫洲です。比較的広い和田浜でも堤防から波打ち際まで約20ｍ程度、浜当目の砂洲は10ｍ未満で、かつて海が迫っていた浜通（はまどお）りでは高浪の際に波が堤防を越えることもありました。江戸時代以来、浜通り付近の砂浜が減退し、明治以降に一時は移住も検討されたこともありましたが、これは戦国（せんごく）末期の瀬替えにより大井川の本流が南下したためとも考えられています。海岸付近は漁港の整備などにより、かつての歴史的景観から変化した箇所もあります。

（２）山地の特徴

焼津市の山地は市域の北側に集約され、高草山を中心とした高草山山地と呼ばれます。山地の面積は５％もありませんが、高草山は市内のどこからでも望むことができる、市民にとって身近な存在で、現在は親子連れでも手軽に登ることのできるハイキングコースが整備され、来訪者は増加しています。

低山ながら雄大に構える高草山（501.4ｍ）は1,800万年前に海底火山の噴火で盛り上った山

写真 1-2　高草山山地

塊です。地質学で有名な枕状溶岩が見られ、急激な火山活動による隆起のため20°～40°と急傾斜地が大半です。高草山の東には満観峰（470 m）、日本坂峠（309 m）、花沢山（450 m）が続き、虚空蔵山を先端に大崩海岸で駿河湾に接します。また、高草山はキスミレやコシノコバイモなどの希少種が生息する貴重な自然が残っていることでも知られます。

写真 1-3　駿河湾越しに望む富士山（石津浜）

（３）川 - 扇状地の特徴

焼津市域は大井川の河川運動により形成された扇状地で、自然現象によって大きく地形が変化してきました。約２万年前の寒冷期には海面が約 120 m低く、大井川や瀬戸川は深い谷底でした。約 6,000 年前の縄文海進では高草山山麓まで海水が侵入し、「古志太湾」と呼ばれる入江が形成されていました。この入江は川の砂礫などによって徐々に埋まっていき、現在の志太平野の地形に近づいていきました。平地には起伏が少なく、河川は網目状に流れ、近世に至っても大井川は３年に１度の割合で洪水を繰り返していました。

前記したように、大井川は和田浜付近を本流としている時期が長く、現在の流路に近づくのは 400 年程前とそれほど遠い昔ではありません。焼津市の埋蔵文化財包蔵地、いわゆる遺跡の分布をみても、瀬戸川流域低地以北に集中し、瀬戸川流域低地以南では大井川地区の藤守遺跡のほかはほとんど見られません（27 頁　図２- 2）。これは人の営みがなかった訳ではなく、大井川が遺跡を押し流したためと考えられます。かつて大井川は現在の瀬戸川下流部分にも網の目状に流れていましたが、その後、流域は南に下り、現在では中央から南の大井川扇状地と、その北の朝比奈川や瀬戸川の流域に広がる低地に分けることができます（図１- 3）。市域全体にはこれらの河川の良質な伏流水が豊富に流れています。

なお、焼津市域では多くの場所から富士山を眺めることができ、霊峰富士への信仰が市内各地に残ります。駿河湾越しに望む富士山は、海に突出した虚空蔵山や遠望される伊豆半島をアクセントとして古くから名所としても知られていました。また、大井川地区など起伏のほとんどない平野のかなたにそびえる富士の姿は雄大で、焼津市特有の自然景観となっています。

（４）気候

年間の平均気温は 17℃前後と温暖で、雪が降ることはほとんどありません。年間降水量は 2,000 ㎜前後で、過去５年平均では晴れの日が 216 日と一年の半分以上を占め、雨の日は 45 日にとどまります。夏は南西風が、冬の平野部では西風が強く、春秋は「ならい」と呼ばれる北東の風が吹くことがあります。

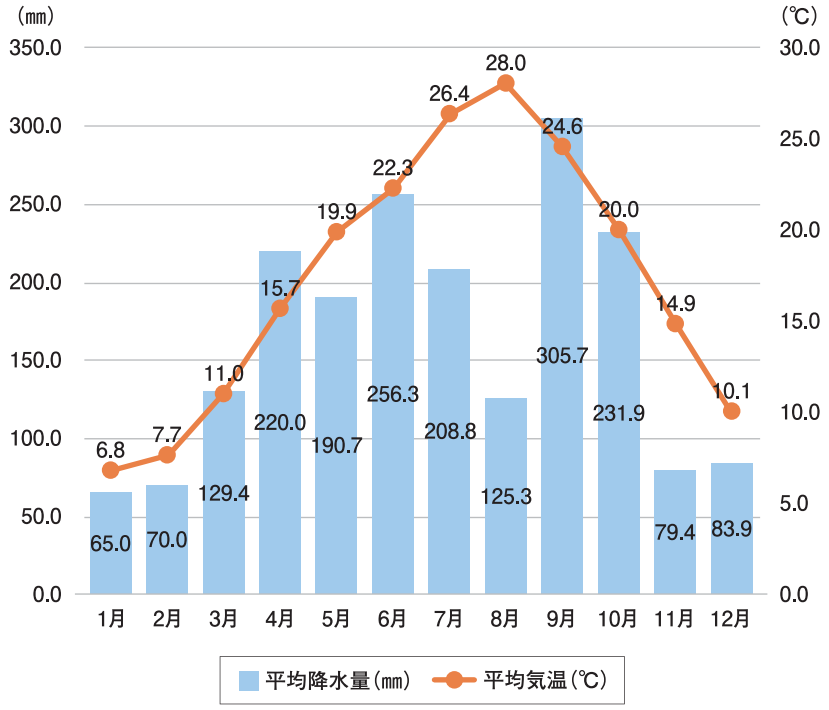


図 1-4　焼津市の気候（平成 27 年～令和元年の平均値）

（５）焼津市の花・木・鳥

市の花は気候を反映した「さつき」で、初夏を中心に市街を彩ります。市の木は「松」で、海岸線沿いの防風林の松並木にも使われ、江戸時代に植えられたものもあります。焼津市指定文化財の「旭伝院（ぎょくでんいん）のマツ」は推定樹齢 600 年以上、高さ 25 m、目回り 5.5 mの巨木で、市の松を代表するものです。水産都市にふさわしい市の鳥「ユリカモメ」には、海岸付近で会うことができます。

写真 1-4　旭伝院のマツ（市指定文化財）

写真 1-5　焼津市の花「さつき」

写真 1-6　焼津市の鳥「ユリカモメ」

３　社会的環境

（１）概況

焼津市の土地利用をおおまかにみると、JR 焼津駅、JR 西焼津駅がある瀬戸川流域低地を中心に商業地域や住宅用地が広がり、市域北部の山地と中南部に農業振興地域・農用地区域が指定されています。大井川左岸や大井川港周辺部は工業地域や工業専用地域に指定されています。

明治時代以降、焼津市域では多くの町村が合併を繰り返してきました（表 1-1）。大井川左岸の一部は当初、浜松県とされた時期もあり、西の文化圏の様相が色濃い地域でした。細かく分かれていた村や字名は時代を経て統合され、使われなくなった地名が多くあります。それらの地名には地区の自然や歴史の特徴を良く表しているものがあります。

行政区域の直近の変更は、南に隣接していた大井川町（現大井川地区）との合併に伴うもので、平成 20 年度（2009）に現在の市域（図 1-6、表 1-1）となりました。焼津市には９地区があり、焼津市立中学校と公民館の設置に重なります。小学校は東益津、豊田、港、和田地区に各１校、焼津、大村地区に３校、小川、大富地区に３校、大井川地区に３校の計 13 校です。

（２）交通

市内には旧東海道の推定地があり、古代には駅家（小河（川）駅）が置かれ、中世に湊が整備されるなど、古来、交通の要所でした。明治 22 年（1889）、東海道鉄道（現東海道本線）が開通し焼津駅が置かれ、近代的な物流基盤が整って以降、現在では人口増加により宅地化が進み昭和 62 年（1987）に焼津藤枝間に西焼津駅も設置されています。道路としては、東名高速道路と現国道 150 号が市域の南北を通過し、東名高速道路には焼津 IC と大井川焼津藤枝スマート IC の２つのインターチェンジがあるほか、新東名高速道路（藤枝市）にも近く、交通の利便性に優れています。平成 21 年（2009）開港の富士山静岡空港からは市域のほとんどが 20 km圏内に含まれるなど、物流や観光交流に資する利便性は向上しています。

図 1-5　現在の焼津市の交通網

隣接する藤枝市（旧岡部町含む）、島田市、吉田町とは同じ大井川流域として、街道のみならず河川を通じた行き来がありました。江戸時代の旧相良街道跡（田沼街道）は藤枝市から本市を通り大井川を川越えして吉田町へ抜けていました。日本初の人車軌道（開通明治 24 年以前）は、藤枝市の大手と焼津駅をつないでいました。また、昭和 23 年（1948）当時、日本最長の営業距離（64.6km）を測った軽便鉄道（駿遠線）が、藤枝市から本市大井川地区を通り、吉田町を経て袋井市まで通じました。

現在、市内には、焼津市自主運行バスが焼津地区、大井川地区を循環しており、自主運行路線以外には私営バスが運行されています。しかし、バスの本数は１時間に１本程度と少ない現状にあります。花沢など人気のスポットまでの移動手段も限られており、観光誘客の観点からも新しい移動手段の検討が必要です。観光ニーズへの対応としては一般社団法人「焼津市観光協会」が運営するレンタサイクルがあり、コンパクトな市域で平地が大半を占める焼津市では、需要が高く、令和元年度（2018）は 1,722 台の利用があり、有効な観光ツールのひとつとなっています。

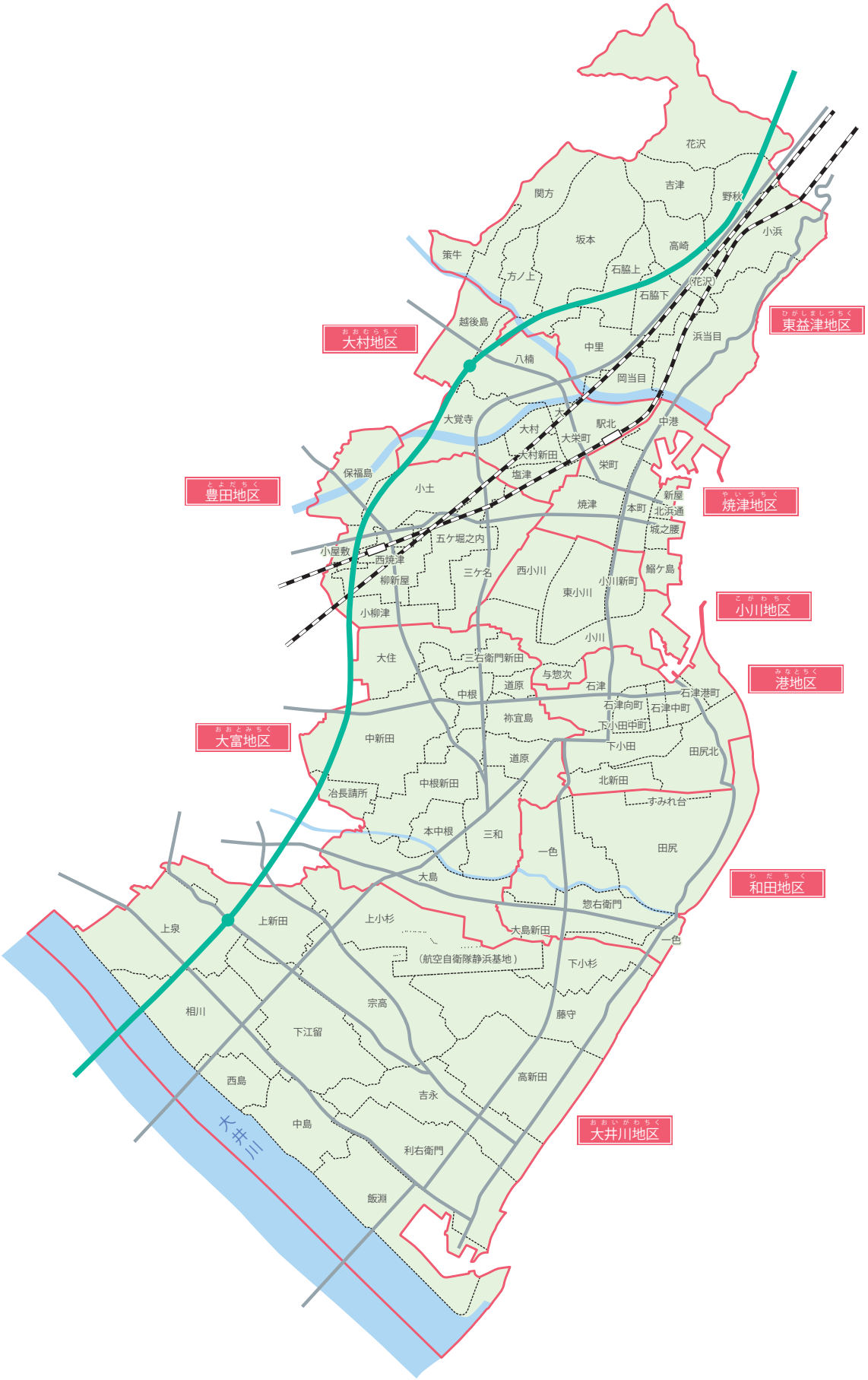


図 1-6　焼津市の行政区と大字

江戸時代	現字名	明治4年(1871)	明治6年(1873)大区小区制	明治8年(1875)	明治9年(1876)	明治12年(1879)	明治22年(1889)町村制施行	明治34年(1901)	昭和26年(1951)	昭和27年(1952)	昭和29年(1954)	昭和30年(1955)	平成20年(2008)
小川村(こがわむら)	小川(こがわ) 焼津(やいづ) 小川新町(こがわしんまち) 東小川(ひがしこがわ) 西小川(にしこがわ)	静岡県	静岡県 第6大区第6小区			志太郡	小川村(こがわむら)			小川町(こがわちょう)		焼津市	焼津市
石津村(いしづむら)	石津(いしづ) 石津向町(いしづむかいちょう) 石津中町(いしづなかちょう) 石津港町(いしづみなとちょう)												
与惣次村(よそうじむら)	与惣次(よそうじ)												
惣右衛門村(そうえもんむら)	惣右衛門(そうえもん)						和田村(わだむら)						
一色村(いっしきむら)	一色(いっしき)												
田尻村(たじりむら)	田尻(たじり) すみれ台(だい)												
田尻北村(たじりきたむら)	田尻北(たじりきた)												
下小田村(しもおだむら)	下小田(しもおだ) 下小田中町(しもおだなかまち) 石津向町(いしづむかいちょう) 石津中町(いしづなかちょう)												
北新田村(きたしんでんむら)	北新田(きたしんでん)												
本中根村(ほんなかねむら)	本中根(ほんなかね) 治長請所(じちょううけしょ)		静岡県 第6大区第7小区				大富村(おおとみむら)						
中根村(なかねむら)	中根(なかね)												
中根新田村(なかねしんでんむら)	中根新田(なかねしんでん)												
中新田村(なかしんでんむら)	中新田(なかしんでん)												
大住村(おおずみむら)	大住(おおずみ)												
三右衛門新田村(さんうえもんしんでんむら)	三右衛門新田(さんうえもんしんでん)												
上小田村(かみおだむら)	三和(みわ)												
治兵衛長(じへえちょう) 次右衛門請所村(じうえもんうけしょむら)	三和(みわ) 治長請所(じちょううけしょ) 本中根(ほんなかね)												
三郎兵衛新田村(さぶろうべえしんでんむら)	三和(みわ)												
祢宜島村(ねぎしまむら)	祢宜島(ねぎしま)												
道原村(どうばらむら)	道原(どうばら)												
大島村(おおじまむら)	大島(おおじま)												
大島新田村(おおじましんでんむら)	大島新田(おおじましんでん)												
保福島村(ほふくじまむら)	保福島(ほふくじま)		静岡県 第6大区第4小区				豊田村(とよだむら)						
三ケ名村(さんがみょうむら)	三ケ名(さんがみょう)		静岡県 第6大区第5小区										
五ケ堀之内村(ごかほりのうちむら)	五ケ堀之内(ごかほりのうち)												
小屋敷村(こやしきむら)	小屋敷(こやしき) 西焼津(にしやいづ)												
柳新屋村(やなぎあらやむら)	小屋敷(こやしき) 西焼津(にしやいづ)												
小柳津村(おやいづむら)	小柳津(おやいづ)												
小土村(こひじむら)	小土(こひじ)												

表 1-1-1　村の変遷

江戸時代	現字名	明治4年(1871)	明治6年(1873)大区小区制	明治8年(1875)	明治9年(1876)	明治12年(1879)	明治22年(1889)町村制施行	明治34年(1901)	昭和26年(1951)	昭和27年(1952)	昭和29年(1954)	昭和30年(1955)	平成20年(2008)
八楠南村(やぐすみなみむら)	八楠(やぐす) 駅北(えききた)	静岡県	静岡県 第7大区第2小区			益津郡	焼津村(やいづむら)		焼津市(やいづし)			焼津市	焼津市
八楠北村(やぐすきたむら)	八楠(やぐす)												
鰯ケ島村(いわしがしまむら)	鰯ケ島(いわしがしま)		静岡県 第7大区第3小区										
城之腰村(じょうのこしむら)	城之腰(じょうのこし)												
北新田村(きたしんでんむら)	北浜通(きたはまどおり)												
焼津村(やいづむら)	焼津(やいづ) 本町(ほんまち) 塩津(しおつ) 小川(こがわ) 小川新町(こがわしんまち)												
新屋村(あらやむら)	新屋(あらや) 栄町(さかえちょう) 本町(ほんまち)												
塩津村(しおつむら)	塩津(しおつ) 栄町(さかえちょう) 焼津(やいづ) 本町(ほんまち)												
焼津北村(やいづきたむら)	栄町(さかえちょう) 駅北(えききた)												
中村(なかむら)	中港(なかみなと) 駅北(えききた)												
大村(おおむら)	大村(おおむら) 大(おお) 大村新田(おおむらしんでん) 八楠(やぐす)												
大村新田村(おおむらしんでんむら)	大村新田(おおむらしんでん) 大村(おおむら) 栄町(さかえちょう) 駅北(えききた) 大栄町(だいえいちょう)												
策牛村(むちうしむら)	策牛(むちうし)		静岡県 第7大区第2小区				東益津村(ひがしましづむら)						
関方村(せきがたむら)	関方(せきがた)												
方ノ上村(かたのかみむら)	方ノ上(かたのかみ)												
坂本村(さかもとむら)	坂本(さかもと)		静岡県 第7大区第3小区										
石脇上村(いしわきかみむら)	石脇上(いしわきかみ)												
石脇下村(いしわきしもむら)	石脇下(いしわきしも)												
小浜村(おばまむら)	小浜(おばま)												
野秋村(のあきむら)	野秋(のあき)												
花沢村(はなざわむら)	花沢(はなざわ)												
吉津村(よしづむら)	吉津(よしづ)												
中里村(なかざとむら)	中里(なかざと)												
岡当目村(おかとうめむら)	岡当目(おかとうめ)												
浜当目村(はまとうめむら)	浜当目(はまとうめ)												
馬場村(ばばむら)	馬場(ばば)		静岡県 第7大区第3小区 (明治8年高崎村)										
成沢村(なるさわむら)	成沢(なるさわ)												

表 1-1-2　村の変遷

<table>
<tr><th>江戸時代</th><th>現字名</th><th>明治4年(1871)</th><th>明治6年(1873)大区小区制</th><th>明治8年(1875)</th><th>明治9年(1876)</th><th>明治12年(1879)</th><th>明治22年(1889)町村制施行</th><th>明治34年(1901)</th><th>昭和26年(1951)</th><th>昭和27年(1952)</th><th>昭和29年(1954)</th><th>昭和30年(1955)</th><th>平成20年(2008)</th></tr>
<tr><td>大覚寺上村</td><td>大覚寺</td><td rowspan="3">静岡県</td><td colspan="3" rowspan="3">静岡県
第7大区第2小区</td><td rowspan="3">益津郡</td><td colspan="4" rowspan="2">西益津村</td><td rowspan="3">焼津市</td><td rowspan="3">焼津市</td><td rowspan="15">焼津市</td></tr>
<tr><td>大覚寺下村</td><td>大覚寺</td></tr>
<tr><td>越後島村</td><td>越後島</td><td colspan="4">広幡村</td></tr>
<tr><td>宗高村</td><td>宗高</td><td rowspan="12">浜松県</td><td colspan="2" rowspan="12">浜松県
第3大区
第21小区</td><td rowspan="12">静岡県</td><td rowspan="12">志太郡</td><td colspan="4" rowspan="4">静浜村</td><td rowspan="12">大井川町</td></tr>
<tr><td>上小杉村</td><td>上小杉</td></tr>
<tr><td>下小杉村</td><td>下小杉</td></tr>
<tr><td>藤守村</td><td>藤守</td></tr>
<tr><td>上新田村</td><td>上新田</td><td colspan="4" rowspan="4">相川村</td></tr>
<tr><td>下江留村</td><td>下江留</td></tr>
<tr><td>上泉村</td><td>上泉</td></tr>
<tr><td>相川村</td><td>相川</td></tr>
<tr><td>西島村</td><td>西島</td><td colspan="4" rowspan="4">吉永村</td></tr>
<tr><td>中島村</td><td>中島</td></tr>
<tr><td>飯淵村</td><td>飯淵</td></tr>
<tr><td>利右衛門村</td><td>利右衛門</td></tr>
<tr><td>吉永村</td><td>吉永</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td>高新田村</td><td>高新田</td><td colspan="4"></td></tr>
</table>

表 1-1-3　村の変遷

コラム：大井川地区の地名

大井川地区に残る字名を見ていくと、川に由来する名称が多くあることがわかります。

「相川」は元々「鮎川」と言われ、鮎が多くいた大井川を示す地名と考えられます。「下江留」や「上泉」は水が富んだ場所を示す「下江富」、「上江富」から文字の形や音の類似から変化した地名だとされます。「中島」や「西島」は大井川の中洲に拓かれた場所を表しており、小字名としては「東島」も見られます。他にも「飯淵」は川の淵を意味する「端淵」「波打」が転訛したという説や「藤守」は大井川の水霊を守る「淵守」からきたものではないかという説もあります。また、「宗高」は草木の生い茂った扇状地の微高地を意味する「叢高」が語源とされ、中世の記録にも残る地名です。

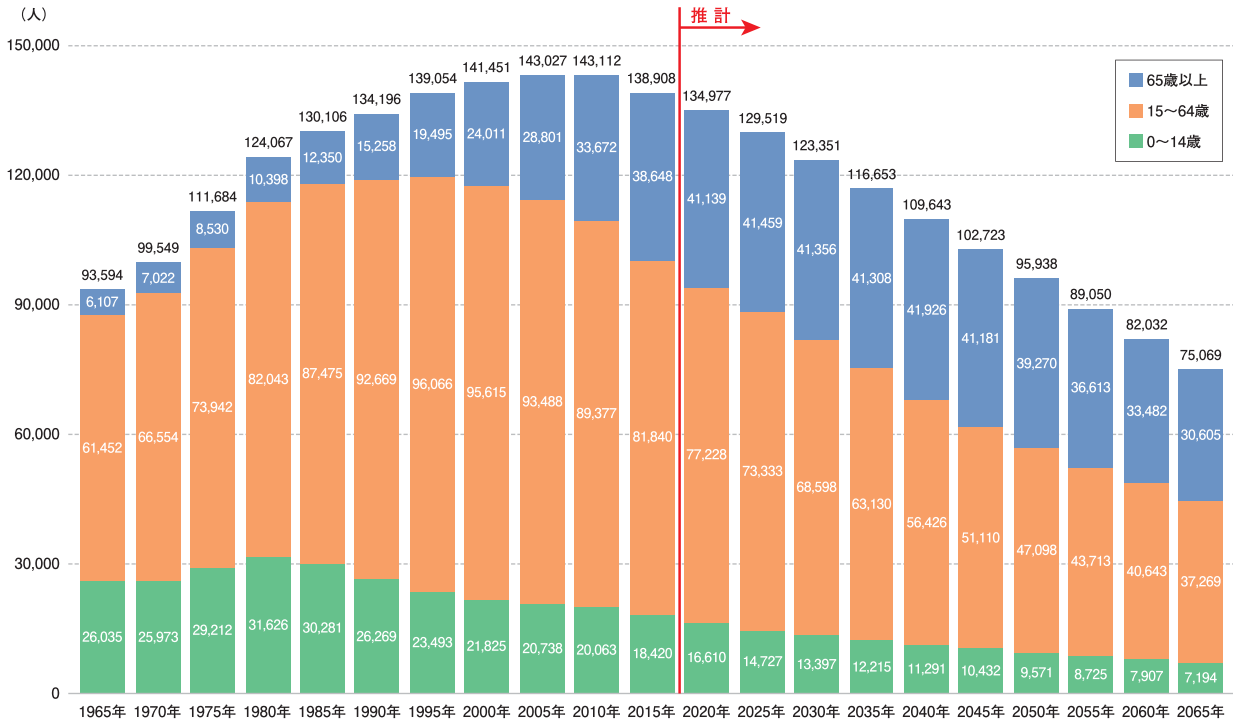
コラム：開発者地名

焼津市域南部を含む志太平野は、大井川の扇状地にあたり、大井川の氾濫が鎮められた江戸時代初期以降、新田開発が進められ、新しい村が誕生しました。中には、その地区を開発した者、あるいは、開発された当時にその地区を束ねていたものの名前がつけられた村名があります。惣右衛門、三右衛門新田、利右衛門など現在の大字に残る村名のほか、左右エ門西（北新田）や与太夫下（中新田）などの小字名や佐平溝（本中根）などの水路名にもみられます。文書記録が無くても、こうした地名から、その土地の成立を推測することができます。

（３）人口

本市の人口は平成 22 年（2010）の 143, 112 人をピークに減少となり、令和２年（2020）の人口は 134, 977 人となっています。将来の推計人口としては、令和 24 年（2040）にはピーク時より約 23％減少し、令和 44 年（2060）には約 43％減少、令和 49 年（2065）には 75, 069 人と人口がピーク時の約 52％になるとの予測が出ています。

現在、総世帯数は増加傾向にありますが、世帯あたりの人口は減少傾向にあり、核家族化や単身世帯の増加が進行しています。また、外国人数は増加しており、小学校に通う外国人児童の人数は全国平均の３倍となっています。



【出典】総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」
【注記】2020 年以降は「国立社会保障・人口問題研究所」のデータ（平成 30 年３月公表）に基づく推計値。

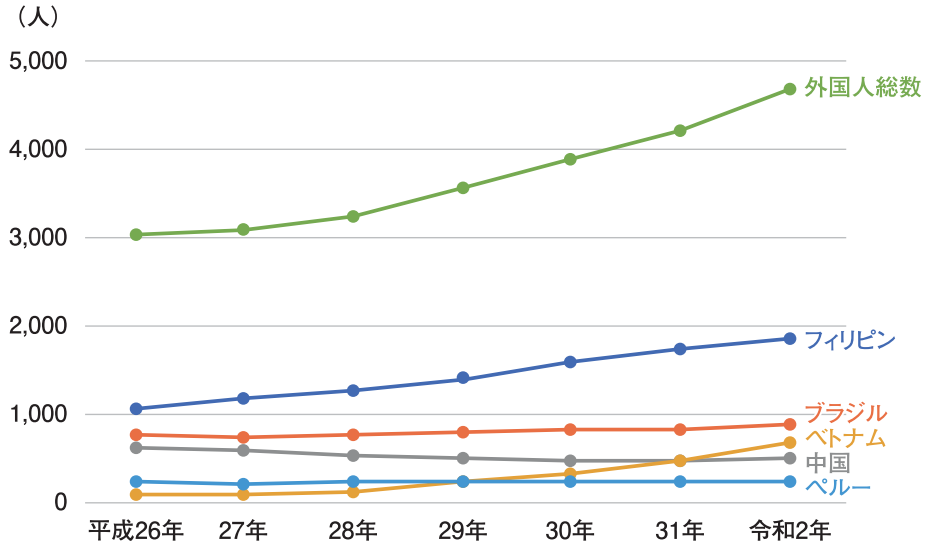


図 1-7　焼津市の人口予想推移と国籍別外国人人口の推移

（４）産業

〈海洋の漁業〉

浜通り付近には中世には海運の拠点としての湊があり、江戸時代はカツオ漁で栄え、明治時代以降は焼津水産翁（51 頁コラム参照）を中心とした先人の努力によって全国に知られる漁業のまちとなりました。和田浜では比較的広い砂礫洲を利用した地引網漁が江戸時代に盛んでした。虚空蔵山のふもとの浜当目や吉永では中世以降、明治 38 年（1905）の塩専売法の施行まで製塩が活発に行われていたことが分かっており、南北に長い海浜部ではそれぞれの地域で地形に合わせた特徴的な漁業文化が培われてきました。

写真 1-7　マグロの水揚風景（焼津港）

焼津は中世以来、海運、漁業で栄えたことが文献に残りますが、戦後、焼津港ができるまで大型船は着岸できず、バージ（はしけ）と呼ばれる小型の船で沖と浜を行き来し、浜に市場が設けられていました。昭和 20 年代後半（1950 年以降）に浚渫港である焼津漁港、小川漁港（それぞれ現在の焼津港、小川港で、２港を合わせて焼津漁港と呼んでいます）が相次いで築港されると水揚量は飛躍的に増大し、浜通りを中心とした市街地には映画館などの娯楽施設が複数開館するなど、漁業の進展によってまちに活気が生まれました。

写真 1-8　小川港の景観

その後、平成 20 年（2008）に焼津市・大井川町の合併で大井川港が加わり、現在では３つの港を有しています。焼津港は今でも日本屈指のマグロやカツオの水揚量で知られる日本有数の港です。小川港ではサバの水揚げが多く、大井川港の中心は物流ですが、サクラエビ、シラスなどの水揚げでも知られます。焼津漁港は、平成 28 年（2016）から令和３年（2021）まで６年連続で水揚金額全国１位を記録しています。日本一を誇る漁業のまちとし

写真 1-9　サクラエビの天日干し（大井川地区）

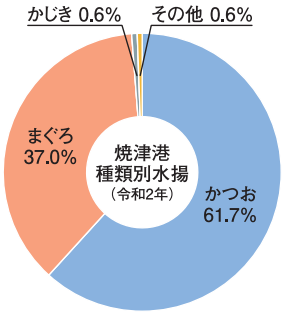


図 1-8　焼津港

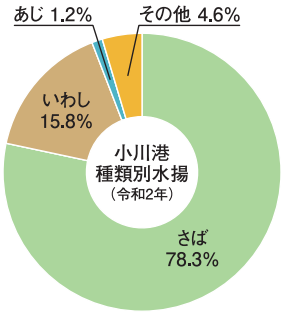


図 1-9　小川港

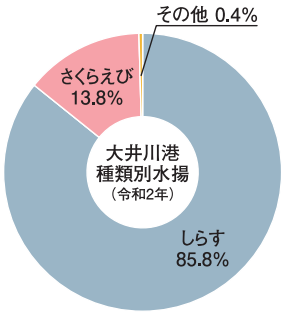


図 1-10　大井川港

て発展し、海浜部は津波対策を含め漁港が整備されています。

内陸部では養鰻池が多く掘られ、現在、数は減少したものの、良質なウナギの飼育が続いています。

＜海産物の水産加工業＞

漁獲量の増加は水産加工業も刺激し、明治以降には「焼津節（やいづぶし）」と呼ばれる鰹節（かつおぶし）などの名産品が誕生しました。明治時代に東海道線が開通し、早くから交通網が整ったことも当地の漁業・水産加工業の発展を後押ししました。鰹節のほかなまり節も有名で、そのほか、塩鯖、しめ鯖、黒はんぺん（ハンペ）やナルトなどの練り製品、佃煮（つくだに）、缶詰（かんづめ）などの加工品が市内各地で生産され、塩鯖は京都など関西圏にも出荷されています。焼津のハンペはサバを中心とした魚の身を練ったもので、かつては各家庭でも作られており日持ちのしないものでしたが、現在では保存技術も向上し、「黒はんぺん」の名称で県内を中心に出回っています。

写真 1-10　水田に残された古代人の足跡（道場田遺跡）

＜農業＞

焼津というと漁業を思い浮かべる方が多いと思いますが、当地は古くから半農半漁で栄えていました。大きくは市域北方に集約される山間地と大半を占める平野部に分かれ、地区ごとに特性のある農業が続いてきました。大井川に代表される市域を流れる河川は、時に家や農地に甚大な被害を与えながらも肥沃な土地を提供し、人々は古くから川と共存し、扇状地では特に水稲稲作が盛んに行われてきました。小川地区には古墳（こふん）時代の水田跡が発見されています。大井川地区に残る、寛和（かんな）年間（985 ～ 987）に始まったとされる「藤守の田遊び」は大井川の治水と稲作の豊穣を祈る祭りであり、これらの文化財に本市の稲作にまつわる歴史の一端が示されています。天正 18 年（1590 年）以降、大井川の本流が南下してからは、市域の中央部では新田開発が盛んに行われました。このため、当地には開発に由来する字名（あざめい）が多く残っています。

写真 1-11　高草山の茶畑

また、現在、大井川地区では「アメーラ」と命名されたトマトや、キュウリなどの野菜類、「志太梨（しだなし）」、メロン、イチゴなどの果樹栽培も盛んです。

写真 1-12　ミカン畑

一方、高草山山地では、江戸時代はアブラギリ（毒荏（どくえ）の木）や楮（こうぞ）などの商品作物が栽培され、明治以降に茶やミカンの栽培が盛んになりました。現在

でも高草山山麓にはミカン畑が見られますが、かつての広さはありません。茶栽培はかなり限定的になっています。農業従事者の高齢化、担い手不足は深刻になっており、放置茶畑が増加しています。伸び放題の茶畑は視界を遮り、イノシシなど有害鳥獣の巣にもなっています。高草山の景観にも変化が出始めており、対策を検討する時期にきています。

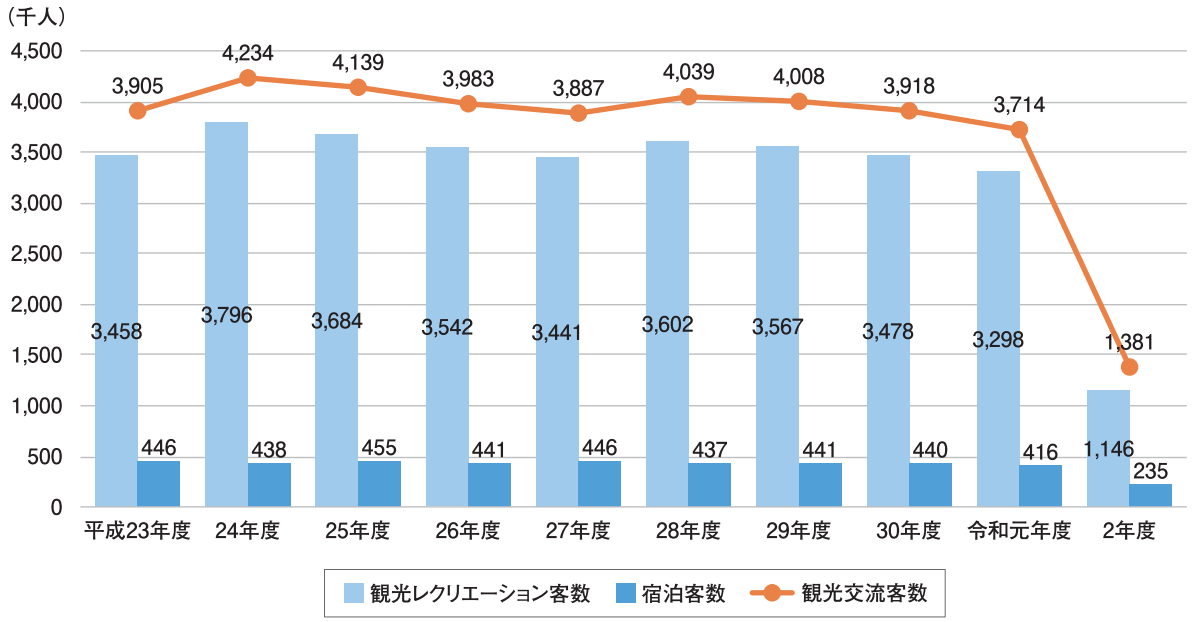
＜観光＞

焼津市は交通の便が良いことに加え、全国有数の魚の水揚量及び水揚金額を誇っており、全国的に「さかなのまち」として知られています。前記したように焼津港、小川港、大井川港では特色ある海の幸が揚り、さらに水産加工品の製造も盛んです。また、「魚河岸（うおがし）シャツ」などの漁業と関係する商品も注目されています。

地元市民にはあたりまえのものかもしれませんが、市外からの来訪者にとっては新鮮にうつるこのような食文化や港町特有の文化を活かした観光や体験プログラムなどを企画、運営する着地型観光の強化が検討されています。

また、北部の山間地には、伝統的建造物群保存地区の花沢地区（花沢の里）などから高草山や満観峰へ登るハイキング道が整備されています。花沢の里観光駐車場（約 120 台）は天候のよい土日祝日には満車となることも珍しくありません。さらに、市域は平坦地が大半のため自転車でも移動しやすく、レンタサイクル事業も好調で、様々な観光資源を結ぶ施策が検討されています。

本計画の上位計画である『文化振興計画』においても交流人口の拡大が目標となっており、庁内の観光部局及び焼津市観光協会、各種まちづくり団体などと文化財の活用を進めています。



※令和２年度の客数の減少は、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言など感染防止対策が講じられた影響によるものと推測されます。

図 1-11　観光客数

＜その他の産業＞

焼津市域全域には豊富な伏流水が流れており、良質な水の恩恵を受けています。大井川地区には湧水も見られます。また、大井川沿いは志太杜氏（とうじ）といわれる醸造集団が活躍した銘酒（めいしゅ）どころと

して知られ、今でも焼津市内には全国的に有名な酒造メーカーが存在します。現在は伏流水を利用する企業が、大井川沿いを中心に多数進出しています。これらの企業や漁業に従事する外国人が年々増加しています（図 1-7）。

（５）施設

市の文化教育関係施設としては公民館９館、小学校 13 校、中学校９校、図書館２館のほか、芸術文化を広める焼津文化会館、大井川文化会館、天文科学を学ぶことができるディスカバリーパーク焼津、子どもが学び遊べるターントクルこども館があります。このうち、公民館は各中学校区内に設置されており、公民館を中心とした市民活動が盛んです。教育施設には高等学校４校、大学１校が加わります。

歴史文化の情報発信拠点としては、博物館相当施設である歴史民俗資料館が焼津文化会館、焼津図書館との複合施設として設置されており、文豪小泉八雲を顕彰する焼津小泉八雲記念館も同じ敷地に併設されています。また、伝統的なまちなみが残る花沢地区には花沢地区ビジターセンター、浜通り地区に浜通り服部家、大井川地区に藤守の田遊び伝承館が、山・海・川（水）のそれぞれの特徴ある地区の拠点施設として整備されています。

そのほか、海岸部には海の生態系や漁業などを紹介する静岡県水産技術研究所（うみしる）や、海洋深層水などを学ぶことができる深層水ミュージアムが設けられています。平野部では、栃山川自然生態観察公園があり、河川の植生などを観察できます。なお、昭和 53 年（1978）に「スポーツ都市宣言」を行った当市では、焼津市総合グランド、青峰プールなど 14 の社会体育施設を整備するなどして生涯スポーツを推進しています。

写真 1-13　焼津の歴史文化を伝える
焼津市歴史民俗資料館

写真 1-14　文豪・小泉八雲の焼津に残る足跡を紹介
焼津小泉八雲記念館

コラム：スポーツ都市焼津　－相撲、レスリング－

本市はスポーツ都市宣言をしており、相撲やレスリングが盛んです。北京オリンピック（平成 20 年（2008））では本市出身の松永共広選手がレスリングのメダリストになりました。

大相撲の部屋として有名な追手風部屋を開いた江戸時代の初代追手風喜太郎は、焼津市宗高の出身です。その生家には追悼墓と顕彰碑が残ります。焼津は現在も相撲が盛んな土地で、市内には公営の相撲場が設けられています。大相撲の力士としては翠富士などが活躍しています。

図 1-12　教育関連施設位置図